

京都銘品 モノ がたり— ⑧

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。

すだれとひと口に言っても、雰囲気や素材も異なる。座敷すだれには金具やふさの飾りがあり、御簾を彷彿とさせる。

京すだれ

打ち水され、しっとりと濡れた石畳に連なる町家。風鈴の音に誘われて目を移すと、軒先にはすだれ。京都らしい夏の光景である。

京都の夏は暑い。6月1日になると町家の建具や敷物も衣替えを行ない、夏のしつらえに姿を変える。畳にはあじろが敷かれ、ふすまは座敷すだれに、障子は^{よし}葎の夏障子へ、そして軒先には外掛けすだれを吊るす。風が座敷を通り抜け、涼を感じる。自然との共生で育まれた「京すだれ」は、今も続く京町家の夏の暮らしに欠かせない。

京すだれは、外掛けすだれ、座敷すだれ、茶室用すだれの3種類を指す。座敷すだれとは、明治維新以降に公家屋敷や武家屋敷、神社仏閣で使われていた御簾が一般家庭向けに考案されたもので、ふすまの代わりに用いられているものだ。細い竹ひごを表裏交互に並べて編み、節で模様をつくって四方に縁をつけ、ふさや金具の飾りをつける。つくり方は御簾と変わらないが、家庭になじむように工夫されて

いる。一方、茶室用すだれは、茶の湯文化とともに京都に根付いており、侘びさびが感じられ、華美ではないが味のあるものだ。これら3種のすだれの中で、もっとも需要が多いのは、外掛けすだれである。

オーダーメイドを可能にする手作業

外掛けすだれの素材は葎や蒲。^{がま}葎は中が空洞で通気性に優れ、蒲は中が詰まっている分、強度に優れる。琵琶湖に近い京都のすだれは、その多くを琵琶湖の葎に頼ってきた。しかし、近年は琵琶湖の水質悪化もあって良質な葎が減り、90余年続く田中すだれ店をはじめ、海外産に頼る店もあるという。

素材の確保が難しくなっているすだれだが、つくり方は昔から変わらない。外掛けすだれの場合、まず葎や蒲の選定、皮をはずして太さを選別、曲がっていたり折れていたりしないか、一本一本手で確かめる。節を触りながら歪みを調整し、細太が交互になるように、さらに硬い部分が端にくるように編み



仕上げの作業。引っ掛ける部分は、盃を逆さにした形に開けられる。これもひとつずつ手作業。



編み上がったすだれの上下に竹を取り付ける。息子さんと2人で分業している。



葎の歪みを調節しながら編み機にセット。葎の硬い部分が端にくるようにそろえて編むことで丈夫に仕上がる。



節がきれいに削られた葎。



95.5センチ×85センチの節止大神葎なら7560円。オーダーメイドもできる。

機にセットして編んでいく。機械編みといっても、いわゆる自動編み機ではなく、「ガシャン」とペダルを踏んで糸をかけていくシンプルなもの。一日に7～8枚編むのが限度という手作業である。機械では京間のサイズ95.5センチから1メートルのものが編めるが、それ以外のサイズや皮つきで編む茶室用は手編み。窓の大きさや用途に合わせてオーダーメイドできるのも、手作業だからである。

編みあがったすだれは、両端を切りそろえ、上下に竹を取り付けて完成。軒に掛けられるように、盃と呼ばれる掛け穴も手作業で開けられている。

あらためて見直されている京すだれ

20軒ほどあった京すだれの店も現在では7～8軒。町家や料亭、神社仏閣に納めているが、上質で長持ちするため頻繁に買い替えるものではない。厳しい経営状況に店をたたむところもある。「忙しいのは祇園祭まで。すだれをきれいにし、祇園祭で

人々に見てもらうのが京都の慣わし」と話すのは田中すだれ店の店主 田中実さん。京すだれの文化を守りたい。だが、文化の継承を重んじれば採算が合わない。そのせめぎ合いに悩んでいたという。

ところが昨年、全国から注文が殺到し、需要が供給を上回った。節電意識の高まりで昔の暮らしの知恵や工夫に関心が集まり、すだれが見直されたのだ。遮光性に優れ、通気性がよいすだれは、町家でなくとも窓辺にブラインド代わりに使え、特に西日が射し込む家では重宝する。そして、何より見た目が涼やかだ。

今年も注目が集まる京すだれ。夏が終われば水洗いし、天日干しするだけという手軽さもいい。雨風を強く受けなければ外掛けすだれで10年、座敷すだれなら20年と長持ちするそれは、気骨のある京都らしい逸品といえる。昔ながらの風情で涼を取り入れれば、こころにゆとりができそう。

(取材協力：田中すだれ店 075-561-2512)